



立正佼成会ニューヨーク教会

320 East 39th Street, New York, NY 10016 TEL: (212) 867-5677

E-mail address: koseiny@aol.com, Website : <http://rk-ny.org>

ニュースレター2021年 6月号

皆様こんにちは！

新緑の季節6月を迎えましたが、いかがお過ごしでしょうか？

NYではマスクを外して歩く人、外さずに歩く人さまざまですがほんのりと明るさが街に見えてきた様子がうかがえます。



さりとてすべてが収まったわけではなく、世界ではまだ感染で命を落とされる方も大勢います。

この感染症でお亡くなりになられた方々に対しご冥福をお祈り申し上げます。そして、現在入院加療中、自宅で療養されている方々の無事回復を祈念いたします。

そして、今なお休むことなく献身的に取り組んで下さっています医療関係の皆様、私たちの生活をずっと支え続けて下さっている行政機関、ソーシャルワーカーの皆様への感謝を心より申し上げたく思います。

先月中旬に私の滞在VISA延長について移民局の係官の方が教会を訪れ施設を見学し、私へのインタビューがありました。その中で仏教や佼成会についての質問もありその内容を短時間で説明する場面があり、日ごろ知っている者同士での会話は相手が理解している内容も分かって話しますが、仏教に初めて触れる方にその概要を簡潔明瞭にお伝えすることの大切さを実感しました。

仏教とは何か、佼成会は何をしているところなのか手短かに分かりやすく伝えるための準備も必要です。こちらが一方的に説明するのではなく、聞く相手が何を知りたいのかをしっかりと理解する必要があります。

このことはこれから私たちが布教活動をしていく時に注意しておく多くのヒントとなりました。

今後そうした内容を私なりに端的にまとめ整理して皆様にもお分けし、いくらかでも参考にして頂ければと思います。

さて本日は、「人が見たり聞いたりすることとその認識」についてお話ししたいと思います。

仏教の仏教たるゆえんであるものの見方の基本は、「あるがまま」を「あるがまま」に見るということですが人はどうしても「あるがまま」に見えないことが多々あります。

それは見る側の偏見であったり、先入観であったり、錯覚であったりと歪んで見えてしまうケースです。仏教ではその歪みの原因となる人の癖をとりのぞき「あるがまま」に見ることができるよう訓練（修行）をするわけです。

耳には聞こえていても聞いていなかったり、目には見えていても見ていなかったりと目や耳の器官とそのことをこころで認識する違いがそこにはあります。例えば有名な話としてマゼラン探検隊の有名な話があります。マゼランは新しい航路を見つけるため4隻の帆船で南太平洋の島々を巡っていました。ある島に到着し10数人を乗せた小舟で上陸すると、そこに土着の人々が集まってきました。その出来事を土着の人々は後に絵に描いて残していました。その絵には岸に着いた小舟とそこから降りてきたマゼランをはじめとする一行の様子が描かれてありました。

しかしその沖に停泊する4隻の大きな帆船は全く描かれていません。それはなぜかという彼らには確かに大きな帆船が目には映っていたかもしれませんがそれが何なのかと言う、それまでに見たことのない大きな帆船についての認識がなく記憶には留まらなかったということです。

それは目に映ったことと心に映像として認識されることの違いが端的に示されています。同様に耳に聞こえ

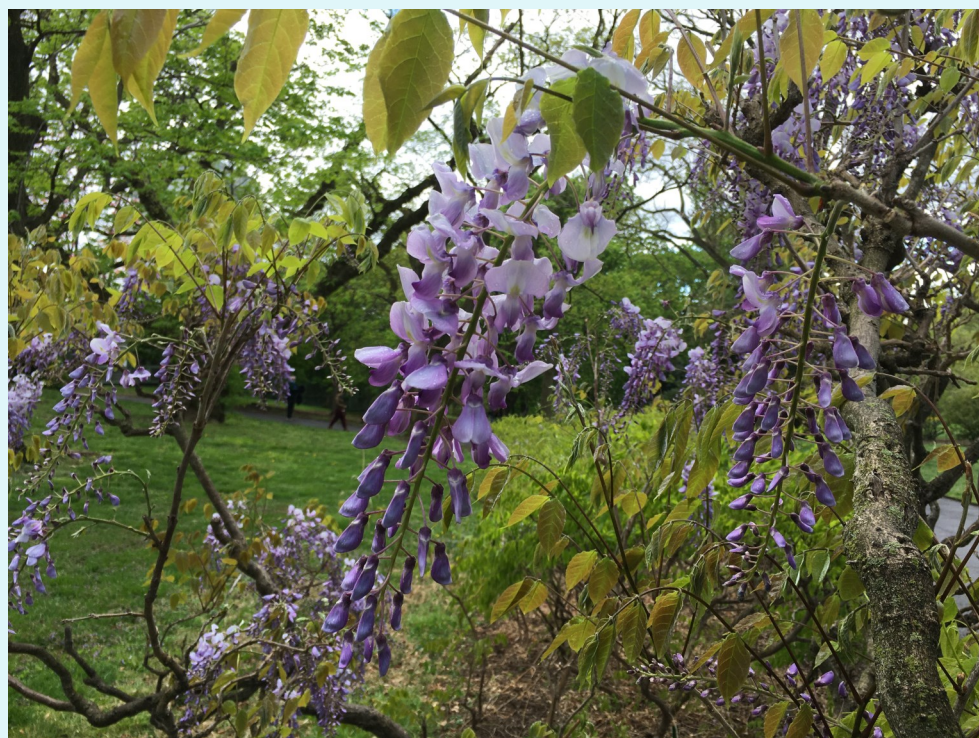
ていることと、認識として聞こえることにも差が生じます。聞いていて聞いていないとか、あることが耳にとまるなどと言いますが、目や耳の器官のはたらきだけではなく人は見えたり、聞こえたりしたことが脳に認識され初めてその認識が心に留まるのではないのでしょうか。

人との会話においても面と向かって話しているようでもところがその話の内容にきちんと向きあっていないと単に言葉だけのやり取りで真の対話にはなりません。言葉は意味や言わんとする概念を伝えるための道具でその内容が相手に伝わらなければ相互の会話が成り立ちません。開祖さまは話の上手な人は聞き上手で相手の話をよく理解しようと努力している。言葉尻だけでなく相手の言わんとすることをここでしっかりと聞くことが大切です。とおっしゃっていますが、まさにその通りです。

見聞きしたことをしっかりと認識する、つまり正しくところに刻んでこそ初めて見聞きしたことになるわけですが先入観、早とちりなどの勝手な解釈が入るところには正しく認識されません。

そのことをお釈迦様は器に入れた水のたとえでこう述べられています。3つの器に水が入れられてあり、一つ目の器は水が赤や青に濁っていたら自分の顔を写してもありのままに見えない。それと同様に人の心が欲のむさぼりで濁っているときはありのままに写らない。二つ目の器は火にかかり沸騰していて自分の顔を写そうとしても泡立ち顔を見ることが出来ない。それとおなじで、人の心が怒りにかきたてられているときはものをありのままに見ることが出来ない。三つ目の器は苔や草でおおわれていたとするとありのままの顔を写し見ることは出来ない。それとおなじことで人の心が愚かさや疑いに覆われていたらものごとをありのままに見ることは出来ない。その水が、にごって、沸騰していず、苔や草で覆われていないときは、人はおのれの顔を写し、ありのままに正しくみることが出来る。

そのように、正しく認識することを「正見」といいますが「あるがままに」を「あるがままに」見られるような澄み切った心境になれるよう今月も日々努力精進したく思います。



合掌

RKNY 畠山友利